

080 チドリ目シギ科 オオジシギ



L-30Cm

英名 Japanese Snipe

日本のシギ。日本とオーストラリアを一気に飛翔し、往復しているようです。この写真を発表したところ、タシギではないかと様々な人々から意見されました。そこで藤波不二雄さんに観察に付き合ってください同定されました。飛びながらズズッと声を発していました。

本来の繁殖地ではズビャークズビャークと叫びながら上昇し、尾羽をこすり合わせてゴゴゴと音を発しながら舞い降りてきます。

081 チドリ目シギ科 タシギ



L-27Cm

西中島の草原の中で毎年、越冬する姿が観察されています。実は夏鳥のオオジシギと、とても似ていて、写真だけでは区別が付きにくいのです。でもタシギは冬鳥、そして水溜りにも平気で入ってゆきますがオオジシギは水に濡れることを嫌うようで水溜りを避けて歩きます。

柴島再生干潟で4月に8羽が、同時に観察されたこともあります。

082 チドリ目シギ科 シベリアオオハシシギ



L-35Cm

2008年5月18日 十三干潟に始めて現れたシベリアオオハシシギ。

ゴカイ堀の人がいてもお構いなし、平然と餌を漁っていました。

真直ぐなくちばし、黒い足、一体なんだろうと撮影に夢中になっていました。

大変珍しい渡り鳥だそうです。



083 チドリ目シギ科 オバシギ



L-27Cm

2000年5月オオソリハシシギの群に紛れ十三干潟で観察されました。まだ夏羽に変わっていませんが、胸にエプロンをしたような黒い模様があります。背中にはきれいな模様がもうすぐ現れます。

2008年には海老江再生干潟でも観察されています。

084 チドリ目シギ科 ミユビシギ



L-19Cm

淀川では厳寒期に観察されています。

シギ類の脚指は後ろに一本前に3本です。ミユビシギの脚指は後ろ指が無いがあっても痕跡だけです。それで3本指のシギと名づけられたのでしょう。

波打ち際で波が来ると逃げて、引き波を追いかけるように引き返して行きます。まるで波と遊んでいるようです。

波に洗われて出てくるカニなどが餌なのです。

淀川では2、3羽の小群ですが、千羽を超える大群になるところもあるそうです。

085 チドリ目シギ科 トウネン



L-15Cm

繁殖地のシベリア北極海沿岸から、最南はニュージーランドまで越冬に出かけて春と秋に日本で体力をつけて、目的地へと旅立ちます。

淀川の干潟は、渡り鳥の貴重なエネルギーの補給基地なのです。

40羽ほどの群が満ちてきた干潟からまだ残っている干潟へと移動しているところです。

086 チドリ目シギ科 ウズラシギ



L-220m

2008年五月 柴島再生干潟に現れたウズラシギ。ムクドリくらいの大きさと、ブリブリリリリと鳴きます。以前にも観察されたそうですが、15年以上前のことです。ウズラシギも波打ち際の餌を食べます。立っていると、お尻が翼と尾羽と少し離れています。

087 チドリ目シギ科 サルハマシギ



L-200m

2007年5月ハマシギにまぎれて一羽の様子がおかしいシギが見つかりました。ハマシギは水際にいるのにそのシギは、やや乾燥しかけた干潟でくちばしを差込み自分で回転しながら餌を引きずり出していました。図鑑で調べてみると、サルハマシギ。やや下に湾曲したくちばしもハマシギとの識別点。一週間ほどでサルハマシギの特徴の赤みの羽に生え変わっていました。

088 チドリ目シギ科 ハマシギ



L-200m

1996年5月 5000羽を超えるハマシギの群が十三干潟に舞い降りてきました。小さくてもこれほど集まるとひとつの勢力となりますね。全羽が着地するのに3分以上かかりました。お腹が黒いのが特徴。干潟上の2羽はダイゼンです。ハマシギの一斉ターン、是非見ていただきたい光景です。

089 チドリ目シギ科 キリアイ



撮影 藤波不二雄

L-16Cm

北極圏シベリアに局地的に、北欧スエーデンやフィンランドで繁殖、越冬地はインドネシアなどの東南アジア。淀川では旅鳥ですが春、秋ともに稀にしか観察されていません。

トウネンとよく似ていますがくちばしが長めなので見分けています。

090 チドリ目シギ科 タマシギ

写真応募中

たいていの野鳥は雌が子育てをしますが、タマシギは雄が子育てをします。雌は産卵すると次の雄を探して去ってゆきます。姿も雌のほうが派手で、地味な雄が抱卵や子育てに勤むので都合が良いのでしょう。眼の大きな赤褐色の雌の姿は見惚れるくらい美しい。

L-24Cm

091 チドリ目シギ科 セイタカシギ



撮影 加藤隆司

赤く長い脚、一度見ると忘れられない印象が残ります。世界的に分布の広い野鳥ですが、繁殖できる環境が狭められています。干潟や湿地などが必要なのです。



L-37Cm

撮影 小松宏明

092 タカ目タカ科 ミサゴ



L-570cm

スズキらしい魚を捕らえ空に舞い上がるミサゴ。毎日のように淀川河口付近の高圧線鉄塔から飛立ち、魚が浮かび上がってくるタイミングを見計らい、両足を突き出し襲い掛かり、獲物をつかんで空に舞い上がります。自身の体重よりはるかに大きな獲物を捕らえることもあります。羽ばたく力がとても強い、勇猛なタカです。

093 タカ目タカ科 ハチクマ

写真応募中

L-550cm

2006年5月、柴島再生干潟の上空を北上する姿が観察されました。

5月から10月初旬までを日本で求愛、営巣、産卵、子育てをして、越冬地へと去って行きます。

子育て中はクロスズメバチの巣を襲撃して、ハチの幼虫を食べたり糞に与えます。蜂を食べることからハチクマと名づけられたのでしょうか。

094 タカ目タカ科 トビ

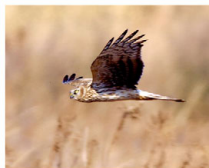


L-600cm

タカ類で最も繁栄していて全国的に留鳥。おとなしい性格でカラスに追われるところを何度も目撃していますが、突然大きな群でカラスを追い出すこともあります。尾羽の中央部分が凹んでいるタカ類は、トビのみです。

魚の死骸や弱った魚をつかんで飛び上がります。面白がって餌付けをしてはいけません、子供の食べているお菓子などを持ち去る出来事が京都鴨川で頻発しています。

095 タカ目タカ科 ハイロチュウヒ



撮影 久留野 明

L-48Cm

十三干潟周辺の葦原上を飛翔する灰色チュウヒ。毎年冬にノズミなどを狙い飛翔します。チュウヒとよく似ていますが、腰の白い部分が飛翔時にくっきりと現れます。行動もチュウヒに似ていますが、朝夕に活発に活動するようです。

096 タカ目タカ科 チュウヒ

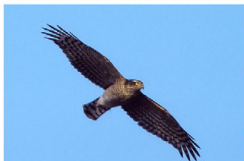


L-52Cm

地べたに巣をかけて子育てをするタカ。冬鳥と思われがちですが、西中島の葦原にて2006年子育てに挑んだことがあります。あと少しで巣立ちと思われていましたが、大雨で巣が流されてしまいました。つばさをV字に広げて飛び急降下、垂直上昇が得意です。



097 タカ目タカ科 ハイタカ



撮影 久留野 明

L-32-39Cm

近年になり冬によく観察されています。オオタカ三兄弟の次男、手入れの行き届いた植林のヒノキ林などが主な生息地。小鳥を主に捕らえています。秋から冬にかけて河川敷にはスズメやカワラヒワなどが群れていて、餌に不自由することはありません。

写真だけですとオオタカと見間違えうくらい似ています。

098 タカ目タカ科 オオタカ

写真応募中

L-50-56Cm

カラスくらいの大きさのタカ。
この鳥が営巣すると開発計画が中止になることもあります。雄が雌より小さく俊敏に飛翔してネズミやウサギ、鳥類も襲います。胸から腹にかけての、横縞模様は雌の方がくっきりしています。精悍な顔、鋭い眼とくちばし、力強い羽ばたき、タカ類の代表。

一時期には絶滅が心配されていましたが、有料道路に沿って餌となるドバトなどが増えて、全国的には個体数を増やしつつあります。

淀川での観察例は秋から冬にかけての記録が多い。

099 タカ目タカ科 ノスリ



L-55Cm

初観察は2000年1月以降毎年観察されています。トビに似ていますがやや小さく、尾羽が少し丸みを帯びていて区別がつけます。ネズミや爬虫類、鳥類、昆虫などを食べています。

100 タカ目タカ科 ケアシノスリ



L-58Cm

2008年早春河川敷の立ち木に止まるケアシノスリ。5月には飛翔する姿が、捉えられました。脚指の付け根まで羽毛がありノスリよりも白っぽい身体です。行動はノスリに似ています。

5月の飛翔中の姿は、風切羽や尾羽が抜け落ちていて、羽が生え変わる途中と思われる姿です。



101 タカ目ハヤブサ科 チョウゲンボウ



撮影 久留野 明

淀川では真夏以外で時折観察されています。バツタを捕らえてみたり、ドバトを捕らえたりと幅広い食性です。ハヤブサより小さくドバトより大きな身体、クリツとした眼が可愛いですね。キッキツとかキイーキイーと鳴きます。二羽のつがいで現れるのは秋の頃。



L-35Cm



102 タカ目ハヤブサ科 ハヤブサ



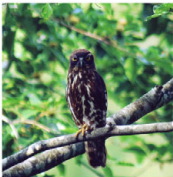
撮影 小松弘明 L-42-49Cm



も見せません。羽ばたきと滑空を繰り返して飛行して獲物を見つけると滑空飛行して狙いを定め獲物に猛スピードで襲い掛かります。

淀川下流域で、チョウゲンボウとほぼ同時期に観察されています。より大きなハシボソガラスの肩をつかみ、鉄塔から飛び降りて地上に激突させて仕留める大技

103 フクロウ目フクロウ科 アオバズク

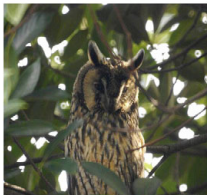


撮影 久留野 明 L-29Cm

青菜の頃日本に飛来して子育てをする頭の丸いフクロウ。寺社の大木で営巣することが知られています。餌はガなどの昆虫やコウモリ、小鳥などで音を立てずに飛び回っています。鳴き声はホッホウホッホウ。ズクと名のつくフクロウは脚がウサギのように羽毛で覆われている種類です。

インドから東南アジア一帯が越冬地。

104 フクロウ目フクロウ科 トラフズク



撮影 藤波不二雄

L-36Cm

大型のシマフクロウ以外のフクロウ類は飛ぶときに音を立てません。したがってフクロウ類の観察に出かけるときには、首をしっかりとガードしておかねばなりません。後ろから頸動脈を切り裂く獐猛さを持っています。

新幹線のパンタグラフから発生する騒音を静めるためにフクロウ類の風切羽の形状が採用されているそうです。

耳が立っています。

お腹の縦縞模様を虎に見立てて名付けられたようです。

105 フクロウ目フクロウ科 コミミズク



撮影 久留野 明

L-38Cm

淀川河川敷で冬を過しています。

夕方、日が沈みかける頃目覚め、準備運動の旋回飛行をします。あまり早い時間に飛び出すとハシボソガラスやユリカモメなどに突付かれる事もあります。獲物はネズミ類、カヤネズミやノネズミが河川敷や葦原に数多く生息しています。

飛行中には見えない耳がとまっているとよく分かります。



撮影 藤波不二雄

106 キジ目キジ科 ウズラ

写真応募中

ウズラの卵は誰でも知っていますね。

ザルそばの汁についている小さな卵です。

ジュビッチャアと鳴き人が近寄ると草陰で動かずじっとして、通り過ぎるのを待ちます。

キジ科なのに尾羽が短くずんぐりとした体形です。

L-20Cm

107 キジ目キジ科 キジ



撮影 藤波不二雄 L-58-81Cm

雄は尾羽が長く、ケケーンと鳴きます。
10年くらい前には観察できていたのですが、
現在声を聞くこともなくなっています。
日本の国鳥、なのに狩猟の対象になっている。
矛盾を感じます。
お馴染みのニワトリ（鶏）もキジの仲間です。

108 ハト目ハト科 キジバト



L-33Cm

過ってはヤマバトと呼ばれ、里山の鳥でした。
現在は都市部でも普通に見られる野鳥になっ
ています。
首の後ろに縞模様があり、この鳥の識別点に
なっています。
ドバトとは交雑が認められません。
13年ぶりに淀川河川敷が雪景色の朝を迎え
た時のワンショットです。

109 ブッポウソウ目カワセミ科 カワセミ

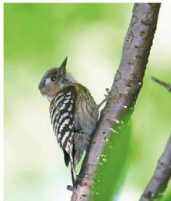


L-17Cm

野鳥の中で一番人気なのがカワセミです。
ずんぐりした身体つき、赤い脚、雌だけ下
のくちしが赤い、コバルトブルーの星模様
が背と翼に有り美しい。チーと鳴き水面す
れすれを一直線に飛びます。
ある程度人に慣れるところがあり、邪魔をし
なければ、撮影は比較的しやすいほうです。
淀川では早朝に時折姿を見せてくれます。



110 キツキ目キツキ科 コゲラ



L-150cm

ギイと鳴く日本最小のキツキ。
白黒の衣装に茶色がアクセント、短めの黒いくちばし。
公園の立ち木や桜並木にきています。
雄の頭には赤い羽毛がありますが普段はなかなか見ることが出来ません。
写真を撮っているときたまたま風が後ろから吹いて偶然取れたものです。
秋から冬にかけては山地でシジュウカラやメジロなどとの混群の最後尾にいることが多い。

111 キツキ目アリスイ科 アリスイ



L-180cm

キツキの仲間ですが自分では巣穴を掘らず他のキツキの巣穴を使用するそうです。アリを食べるため朽木や倒木に止まりアリの長い舌で舐め捕ります。
迷彩色でなかなか見つけにくい野鳥です。

112 スズメ目ヒバリ科 ヒバリ



L-170cm

春にはピーチクパーチクと空を舞いさえずります。河口付近から1000mくらいの高原まで広く分布しています。
淀川では留鳥、ピュルツと鳴いて草むらから飛立ちます。
秋にもさえずり、早くも次の春の相手を探しているのです。

113 スズメ目ツバメ科 ツバメ



L-18Cm

稲作文化と密接に関わってきて、大切にされている野鳥。春の彼岸頃から飛来して巣を修復したり巣を新たに作り、子育てし、秋の半ばに越冬地に旅立って行きます。その間2-3回の繁殖を行い、そのつど雄親は違う個体だと言われている。雛は巣立ちすると、父親が子育てや飛行を教え集団で飛行訓練をして生後約100日で越冬地に旅立ちます。

114 スズメ目ツバメ科 コシアカツバメ



L-19Cm

ツバメの巣は軒下でお椀型ですが、コシアカツバメの巣は室内が多くとっくり型です。ツバメより一ヶ月くらい遅れて飛来します。顔が赤いのがツバメ、腰と頭の後ろが茶褐色なのがコシアカツバメです。

115 スズメ目ツバメ科 イワツバメ



L-15Cm

700mくらいの標高の山地にも、沿岸部の建造物にも、雨のかからないところに、集団で営巣し子育てをします。淀川では10月に小数の群で現れ、飛びながら餌を捕っています。温泉などでは越冬する群が見られますが、通常は夏鳥とされています。

116 スズメ目セキレイ科 キセキレイ



L-20Cm

名の通り胸や腹が黄色いセキレイ。
川の上流部から中流域が主な生息地。
淀川下流域では稀にしか観察されてい
ません。
人をあまり恐れないので、追いかける
れば近くまで来ることがあります。

117 スズメ目セキレイ科 ハクセキレイ



L-21Cm

阪神淡路大震災を予言した鳥。白黒の身体で
顔が白い。普段は十三大橋の近辺の橋で、
4000羽以上の集団ねぐらを形成。この群
が十八条の下水処理場に大挙現れたら、その
夜もしくは翌朝に大地震の可能性が高い。何
故ならば最大級の余震のときも十八条に大挙
現れ、その後大群では現れていません。
色んな鳴き声を出しますがジェイジェイ、
ピチューイ、ジェリリリと鳴くことが多い。

118 スズメ目セキレイ科 セグロセキレイ



L-21Cm

日本の固有種（日本にしかない鳥）。
黒い顔、尾をよく振ります。餌は魚の稚魚や昆虫類。
淀川ではなかなか観察できない野鳥です。
ハクセキレイは大群になりますが、セグロセキレイ
は多くても10羽くらいまでです。
ピチューイとか、チョチョと鳴きます。

119 スズメ目セキレイ科 ビンズイ



L-16Cm

ピンピンズイズイと鳴くセキレイの仲間。
尾の振り方は他のセキレイよりはゆっく
りめ。
淀川では旅鳥で春と秋に観察されている
が少ない。